

1810  
附三

撫順烟臺兩炭坑ニ關スル細則案 説明書

10

新編 朝鮮 通志 卷之三

10

一 百 一 十 一 號 送 付 正 本 庫

1-1810

03:13



サレハ利権回收執ノ熾シシテ且體面ヲ重ニスル清國委  
 實ニ對シテ交渉ノ困難ヲ期シ難キコト 第二最小限  
 度ヲ示シタル細則案ヲ以テ我政府ノ認可及ニ南滿會社  
 ノ承諾ヲ受ケ置キ而シテ最大限度ヲ示シタル細則案以  
 テ清國委實ニ提案スルニアラスレハ我々委實活傷敏括  
 ヲ缺クヘキヲ慮リタレハナリ  
 最小限度ヲ示シタル細則案ニ最モ我々不利益ナルモノナ  
 ルヲ以テ委實ハ最メテ最大最小ノ中間ニ於テ適度ノ協  
 約ヲ決定セシコトヲ期スヘシ

第二 納稅ノ事

(甲) 產出稅

現行ノ清國礦業法ニ據レハ炭坑ニ對スル稅種及ヒ稅額ハ左ノ  
 如シ

一、鑛區稅	每一鑛界即チ十五畝ニ付毎年銀三兩即チ一畝ニ付銀二錢(鑛務法第二章第二十九條第四十二條)
二、鑛產稅	產出每噸銀一錢(同第四十五條)
三、報知銀	純益ノ二割五分ヲ政府ニ納シニ割五分ヲ土地所有者ノ所得トシ五割ヲ鑛業主ノ所得トス若シ土地カ官地ナルトキハ一半ヲ政府ニ納シ他ノ一半ヲ鑛業主ノ所得トス(同第十八條第二十一條)
四、右ノ外試掘又ハ採掘ノ申請ニハ各手数料ヲ要ス	

南滿州鐵道株式會社

會社：於ラハ右ノ税目中第二ノ鑛産税ヲ納付スルコトヲ  
 美諾スルノ外其他ノ課税ヲ肯セサルコトシテ甲案(最大限度ヲ示シタル案)  
 ヲ立案セリ其理由ハ本年九月四日ノ滿洲協約第三條第一  
 條ニ於テ「清國政府ハ日本國政府カ兩炭坑ノ採掘權ヲ有  
 スルコトヲ承認スト規定シ從來屢我ニ對シテ抗議シタル  
 採掘權ノ根本義ヲ茲ニ至リテ全ク承認セリ 採掘權ヲ  
 有スル日本政府ハ清國政府ニ對シテ鑛區税又ハ報効銀等  
 ヲ納付スヘキ理由ナケレハナリ  
 清國政府カ鑛業獨裁主義ヲ破リテ他ノ國家ニ採掘權  
 ヲ讓與スルコトハ破天荒ノ事ニ屬ス清國鑛業法ニ據ル鑛  
 業ハ清國人又ハ清國人ト組合シタル外國人ニ許可スルノ外

斷シテ單獨ノ外國鑛業者ニ採掘スルヲ許サストアリ(鑛務正  
 章第十條第十四條)然ルニ今回日本政府ニ對シテ單獨採  
 掘權ヲ有スルコトヲ承認シタル所以ハ日本カ兩炭坑獲得ノ原因  
 ニ於テ大ニ他所ノ炭坑ト趣ク異ニスルモノアルニ由ラスハアラス即チ  
 (一)兩炭坑ハ日本カ血ト錢トヲ以テ得タル(二)日本ハ露國ヨリ兩  
 炭坑ヲ得タルモノニシテ清國ハ只共事實ヲ承認シタルニ過キサ  
 ル(三)個人ノ合同契約ニ依リテ採掘權ヲ得タルモノニアラスシテ  
 日本ノ實カヲ以テ國家ノ獲得シタルモノナルト是ナリ  
 右ノ理由ニ是ツキ日本政府ハ清國政府ニ對シテ鑛區税即チ  
 鑛區ヲ特許スルニ由リテ生スル税金又ハ報効銀即チ鑛區ヲ  
 特許スルニ由リテ生スル政府ノ純益配當銀ノ如キ性質ヲ有ス

南滿洲鐵道株式會社

ル納税ヲ負擔スル義務ナレト論斷スルコトヲ得ヘケルハナリ  
 滿洲條約第三條第二節ニ依リハ「日本國政府ハ清國ノ一切  
 ノ主權ヲ尊重シ並ニ上記兩炭坑ノ採炭ニ對シ清國政府ハ納  
 税スルコトヲ承諾ス右ノ税率ハ清國他所ノ石炭ニ對スル最  
 惠ヲ標準トシ別ニ規定ス可シトアリ之ニ對應スル清國文  
 字「日本政府尊重中國一切主權並承允上開兩處煤礦開  
 採煤船向中國政府應納各項稅率應按中國他處  
 煤稅最惠之例另行規定」トアリ日本文ニ據レハ日本政  
 府ハ採炭ニ對シテ納税スルコトヲ承諾シタルモノナレハ之ヲ採炭  
 ニ解シ礦產稅ノ外ニ他ノ税金ヲ納付スルコトヲ承諾シタルモノ  
 ニアラスト論シ得ラレサルニアラサルモ清國文ハ此点ヲ應納各項ト

規定セラレ廣義ニ解スヘキニ似タリ故ニ譯字ノ差異ヨリ生  
 スル此点ハ我ニ於テ主張セストスルモ日清兩文トモニ清國他  
 所ノ石炭ニ對スル税率(他處煤稅)トアルヲ以テ報知銀ノ如キ  
 純益配當金ノ性質ヲ有スル税金ヲ負擔スルノ限リニアラス  
 ト論シ得ヘシ何トナレハ報知銀ハ石炭ニ對スル納税ニアラステ  
 純益金ノ處分ナレハナリ  
 礦產稅額ニ關シテ清國礦業法ノ規定ハ每噸銀一錢即  
 シテ大凡稅十三四錢ニ相當ス然レトモ滿洲條約ハ右ノ税率ニ  
 付最惠均霑ノ主義ヲ規定セルヲ以テ必スシモ清國礦業法  
 ノ規定ニ準據スルヲ要セス清國內他所ノ炭坑中何處  
 ノ炭坑カ最も輕稅ヲ負擔シ居ルヤ否ヲ調査スルノ要アリ

滿洲鐵道株式會社

仍多各炭坑ノ納税額ヲ按スルニ大体左ノ數種ニ分カル、  
モノ、如シ

- 一、坑口炭價ヲ一兩トシテ其五分以内ノ落地税ヲ納付スル外毎噸銀一錢ノ出丹税ト八十四文ノ厘捐ヲ負擔スルモノ
  - 二、從價百分五ノ落地税ヲ納付シ純益ノ二割五分ヲ報効スルモノ
  - 三、產額百兩ニ付十五兩ヲ納付スルモノ
  - 四、採掘石炭每千清斤ニ付百分十二兩ヲ納付シ外、坑口ニ對シテ十七兩六八ヲ納付スルモノ
  - 五、清國鑛業法ニ依リテ納税スルモノ
- 之ヲ要スル、何レモ其負擔低廉ナリト云フヲ得ス蓋シ各

國カ清國ノ鑛業ニ垂涎スルノ切ナルマ、大抵合同契約ニ依リテ權利ヲ獲得シ税金ノ如キハ務メテ清國ノ意ヲ迎合スルノ形跡ナキニアラス、而シテ外國人ハ契約ニ依リテ權利ヲ獲得スルニ實際採炭ニ着手セルハ極メテ僅少ニシテ多クハ時機ノ到來ヲ諒ツモノ、如シ之ニ及シテ撫順炭坑ノ如キハ大規模ノ計劃ヲ樹テ着々出炭ノ増加ヲ計リ、アルモノナレハ到底右ノ如キ幽靈的炭坑ト同様ノ納税ヲ約スル能ハサルナリ

甲案ニ於テ税率ヲ坑口原價ノ百分五トセン所以、即チ前記第一ノ場合ヲ援用シ而シテ第二ノ場合ニ於テ純益ノ二割五分ニ當ル報効銀ヲ納付セザン意見ナリ、其理由ハ前ニモ言ヘルカ如ク報効銀ハ國家カ採掘權ヲ鑛業主ニ付

與シタル報償トシテ參加スル純益ノ配當シテ石炭ニ對スル税金ミアラス兩炭坑ノ如ク日本ヲ露國ヨリ實カヲ以テ獲得シタルモノニシテ清國政府ハ單ニ其事實ヲ承認シタルニ止マルモノニアリテハ清國政府ニ報効スル筈ナケレハナリ且施テ例ヲ求ムルトキハ先日廢約トナリタル直隸省外南標炭坑又ハ安徽省ノ宣城炭坑ノ如キ是ナリ坑口原價ノ何程ナリヤハ確定ノ數字ニアラサルヲ以テ清國委員ニ於テ同意ヲ難シスルナラン然レトモ兩炭坑ノ會計ハ公明正大ノモノニシテ決シテ賦稅ノ計ハ如キコトナキ事ヲ信用セシムルヲ得ハ此原價主義ノ課稅ヲ以テ最モ公平ヲ得タルモノトス何トナレハ撫順炭坑ノ如キ將來出炭ノ増加スル所ニ在

リテハ數量ノ増加ニ伴ヒテ原價低廉トナルモ結局納稅額ハ益増加スヘク而シテ會社ニ於テモ販路擴張ノ爲メ噸當リ稅額ノ低減スルノ必要アリテ伸縮自在ノ妙アレハナリ然レトモ清國政府ニ於テ原價ノ確定數ニアラザルヨリ多少不安ノ念アルヘキヲ慮リ乙案第七條第二項ニ於テ出炭ニ關スル帳簿點檢ノ權利ヲ與ヘタリ

備考

乙案第一條ニ鑛產稅トシテ每英噸銀一錢鑛區稅トシテ坑口一ヶ所ニ付銀十七兩六分ハ割合ヲ以テ納付スルモノトシテ起案セリ清國鑛業法ノ鑛區稅ハ一錢界即チ十五畝毎ニ銀三兩ナルモ之ニ依ルトキハ

有備州鐵道株式會社





撫順炭坑、如キハ每年約一万八千兩、納税ヲ要スルヲ以テ東清鐵道黑龍口炭坑ノ例ニ採用シ坑口一ヶ所ニ付十七兩六八トセリ

(乙) 輸出税

甲案第二條ノ石炭ノ輸出税ニ付テハ滿洲協約第三條第三條ニ於テ最惠ノ輸出税率ヲ適用スルコトヲ承諾スル旨規定セラル第ニ号ノ如ク別ニ規定スヘシト規定セラレザルヲ以テ本件ニ此ノ細則ニ於テ協定スルヲ要セス直ニ最惠ノ税率即チ每英噸銀一錢ノ税ヲ適用セラルモノ、如シ 然レトモ本件ニ陸路通商ノ輸出税ト密接ノ關係ヲ有スルノミナラス大連

港ノ實例ハ今高三錢税ヲ拂ヒツ、アルヲ以テ茲ニ規定スルコト、セリ

清國ノ関税率ニ據リハ石炭ノ輸出税ハ左ノ如シ

- 一 外國煤 一噸ニ付 銀五分
- 一 湖北、安徽、廣西、開平、江西、閩省、遼寧、青島、土煤 全 銀一錢
- 一 四川土煤 全 銀二錢
- 一 土煤(四川以外) 全 銀三錢

即チ海口ヨリ輸出スル最惠税率ハ銀一錢ナリ  
陸路ヲ經テ韓國ニ輸出スル石炭ニ付テハ中俄陸路通商章程ニ據リ輸出正税ノ二分ノ額ヲ納付ス  
開平炭坑ニ於テハ輸出ノ石炭ニ對シテハ厘捐ハ十四文ヲ



納付スルノ外輸出税トシテ銀一錢ヲ納付シ鑛産税ヲ納付セサルモノ、如シ左記ノ訓令之ヲ証スルノミナラス實際人ヲ派シテ調査セル處ニ據ルモ亦然リ

北洋大臣袁鈞飭酌加開平煤稅文 光緒二十九年

前略、本大臣准此查開平煤稅煤釐前據總辦開平礦務局嚴道揚道查復該礦所出之煤由唐山運銷內地各處者每噸抽稅銀一錢抽釐捐制錢八十四文由閩莊稅務局查收其運出海口者稅督徵局只收釐捐由海關收出口稅每噸銀一錢其出口復進他口者海關收復進口稅每噸銀五分云々  
(約章成案匯覽十二下卷照)

右、理由ニ依リ甲案第二條第三項ニ於テ輸出税ヲ納付スル石炭ニ對シテハ鑛産税ヲ納付セサル旨ヲ規定セリ但開平炭坑ノ納稅額ハ果シテ右ノ如クナルヤ否ニ付テハ同炭坑、秘密ニ屬シる者外者ヨリ之ヲ調査スルハ困難ナルノ事情アルヲ以テ場合ニヨリテハ双方、委實立會ニ上調査ヲ要スルヤモ討ラレス

營口又ハ大連ヨリ直隸省ニ輸出スル石炭ニ輸入口ニ於テ沿海貿易稅即チ輸出税ノ半稅ヲ課セラルヘキモ京奉線ニ依リテ陸路直隸省ニ販出セラル、場合ハ何等ノ課稅ヲ受クルコトナシ

備考

乙案第二條、於海ロヨリ輸出スル石炭並陸路  
轉國ニ輸出スル石炭ハ何レモ一錢稅ヲ課セラレ而シテ  
輸出稅ヲ課セラル、石炭モ尚鑛產稅ヲ課セラル、モ  
トシテ規定セリ

### 第三 納期ノ事

甲案第三條ハ納期ヲ規定ス清國鑛業法ニ據ル鑛產  
稅ハ前月中ノ產出額ヲ按シ當月十五日ニ納付スヘキモノ  
ナリ(鑛務法章第四十六條)然レトモ東清鐵道會社ノ黑龍  
吉林ニ於ケル採炭條約ノ如ク每年四回ニ納稅スルヲ約シ  
タル例アルヲ以テ本條ニ於テハ會社ノ便宜上鑛產稅ヲ

毎年二回ニ輸出稅ヲ毎月一回ニ納付スルコト、セリ

炭坑ノ決算ハ毎年三月及九月ノ二期ニシテ鑛產稅  
ノ納期ハ六月及十二月ナレハ其稅額算定ノ方法ハ左  
如シ

- 一、三月ヨリ九月迄ノ出炭高及ヒ炭價ノ按シテ稅率  
ヲ乘シ稅額ヲ定メ之ヲ十二月ニ納付ス
- 一、十月ヨリ翌年三月迄ノ出炭高及ヒ炭價ヲ按シ  
テ稅率ヲ乘シ稅額ヲ定メ之ヲ六月ニ納付ス

### 備考

乙案第三條ハ納期ニ付右ノ如キ簡便法ヲ採ル  
ヲ得サルモノト仮定シテ鑛產稅ハ毎月一回、鑛界

年租ハ毎年一回、輸出税ハ輸出ノ都度納付スルコト  
トシテ規定セリ

第四 船用炭ノ事

船用炭ニ付ラハ左ノ理由ニ依リテ課税ヲ否認セントス

第一、船用炭ハ輸出ニアラス普通ノ意義ニ於ケル輸

出ニハ必ス之ニ伴フ輸入地即チ仕向港アルヲ要

ス

第二、大連海關及内地汽船航行ニ關スル協定第六

條ニ依リ「清國商品及ヒ產物ニシテ大連ヨリ他

所ニ船積セラルトキハ現行條約ニ據リ輸出税

ヲ納ムヘシ

*When Chinese merchandise or products  
brought from the interior of China into  
the Japanese leased territory are shipped  
from Dairen to other places, they will  
pay the export duty according to the  
existing tactics.*  
即チ船用炭ハ右所謂他所へ船積セラル貨物  
ニアラス

船用炭ハ清國從來ノ實例ニ徴スルモ之ヲ無税トセシムル  
コトハ困難ナリト想像セラルモ會社ハ現ニ之ニ付テ抗議

南滿洲鐵道株式會社

ヲ為シワ、アルモノアレハ茲ニ之ヲ規定セリ

甲案第二條第三項ニヨリ輸出炭ニ鑛産税ヲ課セラレサルコト、ナルトキハ船用炭ハ輸出ニアラストスルモ尚鑛産税ヲ課セラル、コト、ナルヘク茲ニ規定ノ利益ナキカ如キモ右第三項ノ成立スルヤ否ハ未定ノ問題ナルヲ以テ暫ク茲ニ掲クルコト、セリ

備考

乙案ニ於テハ船用炭無税説ノ成立シ難キヲ想像シ之ヲ規定セス

第五 自用炭ノ事

甲案第五條ハ清國官衙ノ需用炭及ヒ會社ノ自用

炭ニ對シテ課税セシメサルノ主義ヲ援用セリ會社ノ石炭消費額ハ莫大ノ數量ナルヲ以テ重要ナル規定ノ一トス而シテ其實例ハ臨城炭坑又ハ井徑炭坑ニ據テリ聽ク所ニ依リハ關平炭坑、如キモ自用炭年額十三萬餘噸餘炭五萬餘噸ニ對シテ課税ヲ免レ居ルト云フ

備考

炭坑ノ自用炭ヲ無税トスルハ或ハ成立期スヘキモ會社全體ノ自用炭ヲ無税トスルハ成立シ難キヤモ計ラレス仍リテ乙案ハ本條ヲ規定セス

第六 税種ヲ限定シ並ニ輕税均霑ヲ

約スル事

甲案第六條ハ兩炭坑ノ石炭ニ對スル納稅種類ヲ鑛產稅及ヒ輸出稅ノ二種ニ限定シ其他ノ内地稅又ハ厘捐等ヲ課セシメサルコトシ且他所ノ石炭ニシテ兩炭坑ノ石炭ヨリモ課稅ヲ輕減セラルルモノアルトキハ之ニ均霑スルコトヲ得ル權利ヲ留保セリ但シ輸入地ニ於ケル一子稅ハ清國一般ノ規定ニ據リテ之ヲ免カルコト能ハサルハ勿論ナリ

備考

乙案ニ於テモ亦本條ヲ規定ス

第七 鑛區ノ事

鑛區ハ確定ノ事實ナルヲ以テ漫リニ之ヲ動カスコト能ハス只會議ノ際幾分讓歩ノ餘地ヲ存スル為ノ甲案第七條第二項烟墨炭坑ノ鑛區ニ於テ尾明山ヲ鑛區中ニ包含セシメタリ又撫順炭坑ノ鑛區ニ付テハ曾ラ圖面ヲ交渉ノ司使ニ手交シタルコトアリテ今日ニ於テハ之ヲ伸縮スルノ餘地ナシト雖モ若シ萬一幾分ノ讓歩ヲ為スノ必要アリトセハ炭層ノ分布セザル部分ニ於テ圖面ヲ縮ムスルハ差支ヘザルコトナリ

撫順炭坑ノ鑛界ハ左ノ理由ニ因リテ主張スルヲ得ヘシ

一 光緒二十七年十一月初一日增祺將軍カ當時ノ撫

順煤礦公司ニ下付シタル執照ニ「軍督部一室

増奏准開辦千山台南北小河以東等處煤礦  
 所有河東一帶地方」云々トアリ即チ此ノ許可證  
 ハ河東一帶ノ炭層ヲ指スモノニシテ清國委員於  
 テモ異議ヲ容ルヘキ餘地ナキナリ而シテ河西一帶ハ從  
 來事ナキ所ナレハ茲ニ舉證ノ必要ナシ  
 二、千八百七十年露國退役陸軍大佐「ヤコフ、フエオド  
 ロウイチ、ルビノフ」及「紀鳳台」連名ニテ露國外務  
 大臣へ提出シタル願書ニ依ルニ「撫順炭坑ハ奉天  
 府ノ東方四十露里乃至四十五露里ニ在リテ撫順  
 界渾河々壺中ニ存在ス而シテ石炭採掘ノ為メ  
 炭坑會社ニ交付シタル地區ハ延長二十露里ニ

シテ幅員ハ撫順界石炭層ノ全部ニ互リ其全面  
 積二百平方露里ヲ超ユ云々トアリ此面積ハ會社  
 ノ主張スル鑛區ノ面積ト符合ス  
 三、千九百三年前記「ルビノフ」及「紀鳳台」陸軍中  
 佐「アレクサンデル、セノオ」ノウイチ、マドリートフトノ間  
 ニ撫順煤礦ノ賣買契約書ニ據ルニ「光緒二十七年  
 七月八日盛京將軍増ハ北京政府ノ許可ヲ經テ中略  
 撫順界千山臺地方ニ於テ南方ヨリ北方ニ流ル小  
 河ノ境トシ直東方ニ於テ同界内石炭分布區全  
 部ニ互リ無期限ニテ石炭採掘ニ着手スルノ權ヲ  
 官吏翁壽及「顔之樂」委任シ」云々トアリ之

南滿州鐵道株式會社

撫順河東に於ては石炭の分布區全部、鑛區ヲ指ス、明ナリ

四、撫順炭坑ノ鑛區ハ楊柏堡河ヲ以テ二分シ河東ヲ翁壽、河西ヲ王承堯ニ許可シタルモノニシテ河西ノ鑛區ハ初メ王承堯其他清國人ノ合同資本、經營ナリシモ遂ニ露清銀行ヲ株主ニ加フルニ至リテ露清合同經營トナリ而シテ戰役中露國ハ兵力ヲ以テ其鑛區ノ一部ヲ占領シ專テ東清鐵道ノ利益ヲ爲シテ經營シタルモノナリ故ニ撫順炭坑ノ鑛區ハ不可分シテ炭層全部ヲ包括スルハ疑ヲ容レサル所ナリ

烟臺炭坑ノ鑛區ハ左ノ理由ニ據リ主張スルヲ得ヘシ

- 一、露國着手前烟臺炭坑ノ鑛區ハ八個龍票即チハ鑛區、分割セラレタリシヲ露國ハ其内ノ五鑛區即チ韓潮、赫松林、祝恩隆、劉祿秀及ヒ李潤ノ五龍票ヲ買收シ光緒二十六年中、於テ東清鐵道會社ハ之ヲ代金合計五万八千兩ヲ票主ニ付拂ヒタリ 仍リテ右五鑛區ハ我ニ屬スルヲ疑フ容レシハ他ノ三鑛區ノ内王家ニ屬スル錫子峯、東清鐵道會社ヲ年々五百二十兩ノ租銀ヲ票主ニ交付スル契約ヲ以テ租借シタルモノ又王家ニ屬スル他ノ一區即チ茨見山西南ノ鑛區ハ露國ノ資本ニ依リ露國



ノ人吏頭目仁成タルモノ王ヨリ租借シテ經營シタルモノ  
 シテ是レ亦東清鐵道ノ利益ノ為メ經營セラレタルモノ  
 テハ「ポーツマス條約」後リテ我ニ屬スルヤ明ラカナリ  
 殘條ノ一箇區即チ趙家寨ノ老虎峯ニ東清鐵道  
 會社カ之ヲ買収セシト歟シテ未タ果サリレモノナレハ王  
 家寨ノ如キ証憑ヲ缺クト程モ是レ亦東清鐵道ノ  
 利益ノ為メ經營セラレタリト見ルハ當トスヘク其原因  
 ノ如何ニ拘ラズ我ニ帰屬スト云フヘシ 但王家ノ二  
 票ハ其後官ニ沒收セラレ趙家ノ一票ハ紛失シタル由  
 ナレハ今日ニ於テハ票主ナキ筈ナリ  
 三、尾明山炭坑ハ光緒二十九年清國人李希珍

ナルモノト密高紀道吏アルモノトノ合同契約ニ據リ  
 右二万兩ヲ出賃シテ天利公司ヲ組織シ票主李慎  
 ヲリ權利ヲ讓リ受ケテ採掘セシモノニシテ東清鐵  
 道ノ利益ノ為メ經營セラレタルヤ否ハ明ラカナラス  
 備考  
 乙案第五條ニ於テハ烟臺炭坑ノ鑛區中ニ尾明  
 山ヲ包括セズ是レ冒頭記載ノ理由ニヨリ讓歩  
 ノ必要アルトキ之ヲ拋棄セシカ爲メナリ  
 第八 鑛區侵奪ヲ豫防スル事  
 甲案第六條ハ鑛區ノ侵奪ヲ豫防スル爲メ左ノ二條件ヲ

南滿州鐵道株式會社

規定ス

一、會社ノ外何人モ石炭ノ試掘又ハ採掘ヲ許可ス  
ハカラサルコト

二、既ニ許可ヲ與ヘアル試掘權又ハ採掘權ハ速カニ之ヲ  
取消スヘキコト

右第ニ、新屯ニ於ケル試掘許可並ニ打營咀子ニ於ケル採  
掘許可ヲ取消サシメントスルモノナリ

打營咀子ニ於ケル採掘許可ハ明治四十年十月(光緒二十  
三年九月)大來公司ニ交付シタルモノナリ大來公司ハ奉天ノ  
人孫世昌興京界房身ノ人佟恩陞及ヒ孫松森ノ三人ノ  
合同出資ニシテ資本金額二万兩ヲ以テ組織セラレタル

モノナリト云フ

右ハ撫順炭坑ノ鑛區ヲ侵害シタル不法ノ許可ナルヲ以  
テ明治四十年一月奉天鑛政調査局ニ呈リテ事實ヲ  
確カシ同年十二月十二日當時ノ交涉司使陶大均ニ面會  
シテ撫順炭坑ノ鑛區區畫ヲ手交シ且同使ニ對シテ鑛區  
内ニ於テハ何人モ許可ヲ與フ可ラス并ニ既ニ與ヘタル許  
可ハ速カニ之ヲ取消スヘキ旨ヲ述ベ且炭坑ハ鑛區ハ維持  
スル為ノ鑛界線ニ沿フテ標杭ヲ樹ツヘキ旨ヲ告知セリ  
仍シテ明治四十二年二月右ノ標杭ヲ樹テ同月十九日鐵  
道ヲ大來公司ニ派シテ採掘ヲ差止シメタリ 然ルニ公  
司ハ其差止ニ服セス清國官憲亦何等ノ處置ヲ取ラ

南滿洲鐵道株式會社

スレテ以テ現今ニ至リタルモノナリ故ニ此ノ採掘許可ヲ取消  
スニ當リテ大米公司ノ蒙リタル損害ハ宜シク清國官憲具  
責ニ任スヘキモノナリ

新屯ニ於ケル試掘許可ハ明治四十一年七月二十九日(光緒  
三十四年七月二日)農工商部カ廣東人周佐龍ニ交付シ  
タルモノシテ探鑛執照ニ據レハ其區域ハ東至新屯南至  
南溝西至萬屋北至龍卜坎大河トアリ 周ハ右ノ執照  
ニ依リテ試掘ニ着手セントスルヤ炭坑長ハ抗議ニ會シ尋テ  
知縣朱孝威ト炭坑長トノ間ニ紛議ヲ生シタルモ奉天ニ於  
テ兩國代表者交渉ノ結果トシテ鑛區問題決定スル迄  
双方之ニ着手セサルヲ約シテ今日ニ至リタルモノナリ 故ニ此ノ細

則ノ効力ニ據リテ試掘許可ヲ取消スニ當リテモ周ノ蒙ル  
損害ハ亦清國官憲共責ニ任スヘキナリ

烟臺炭坑ニ付テハ尾明山ヲ除クノ外目下鑛區侵害等事  
實ナシ既往ノ侵害事實ハ之ヲ咎ムルノ必要ヲ認メズ

### 備考

本條ハ鑛區侵害ヲ防止スル爲ノ必要ヲ規定スル  
ヲ以テ乙案ニ於テモ之ヲ第六條ニ掲上セリ

### 第九 鑛區侵害者處分ノ事

甲案第九條ハ鑛區侵害者アリタル場合ニ之ヲ處分スル方  
法ヲ規定ス而シテ其實例ハ千九百七年黑龍江省炭

礦採掘條約ニ依リタルモノナリ即チ同條約第十二條ト曰ク  
採掘地境界ハ必ズ明ニ示レ或ハ柵ヲ設クヘキモノトス若シ清  
國人ミシテ其採炭地域ヲ侵ストキハ之ヲ清國警察ニ渡スモ  
ノトス清國官憲ハ炭坑長トノ關係ヲ正シ直チ清國法  
律ニ依リテ之ヲ罰スルモノトス

備考

本件ハ清國委員ノ同意ヲ難シスルヲ慮リ乙  
案ニハ之ヲ省ケリ

第十 採炭、運炭、鑛吏ノ雇傭ニ便宜ヲ  
與ヘシムル事

清國ニ於テ事業ヲ營ムニ當リテ其最ニ怖ルヘキハ清國  
官吏ヲ陰カニ勞傷者ヲ指啖シテ同盟罷工ヲ企テレン或  
採炭、運炭又ハ鑛吏ノ雇傭ヲ妨害スルヲナリ故ニ甲案第  
十條ニ於テ西炭坑ノ採炭、運炭又ハ鑛吏ノ雇傭ニ關シテ  
便宜ヲ與ヘシムルノ必要上ヨリ本條ヲ規定ス

備考

會社ニ納税ヲ約スル限リ清國ハ右ノ便宜ヲ與フ  
ヘキ義務アリト認メ乙案第九條ニ於テ亦之ヲ  
規定セリ

第十一 民地ノ買収及ヒ鐵道ノ延長ニ便宜ヲ

與へしムル事

将来新タ、鑛区内ニ堅坑ヲ開鑿スルニ當リテハ必然ニ民地ノ買収ヲ要シ且鐵道ノ延長ヲ要スルハ明ラカナルヲ以テ其時ノ紛糾ヲ避ケ且相當ノ便利ヲ與へしムルノ必要アリ故ニ甲案第十一條ニ於テ之ヲ規定セリ

備考

本件ニ於テ經營上必要ノ規定ナルヲ以テ乙案第十條ニ於テモ亦之ヲ規定セリ

第十二 家屋ノ貸付シ且帳簿ノ點檢ヲ承諾スル事

清國ニ採炭量ノ料リ或ハ税金ヲ徴收スル等ノ爲メ官吏ヲ炭坑ニ派遣スルニ至ルヘク且其駐劄ニ供スル爲メ家屋ノ無賃貸付ヲ要求スルニ當リ之ヲ應諾スルノ至當ナルヲ認メ乙案第七條第一項ニ於テ之ヲ規定セリ而シテ其實例ニ東清鐵道會社ノ黑龍口省炭礦採掘條約ニ依ル同條約ニ曰ク東清鐵道會社ノ下ニ在リ採炭地ニ黑龍江省交涉司ヨリ清國全權委員派遣シ茲ニ任シ採炭量ノ料リ露國炭坑長ト共ニ報告書ヲ作製スルモノトス而シテ派遣員ノ住所ニ會社ヨリ給與スルモノトス

鑛産税ハ坑口原價ヲ標準トシテ納税スルノ結果ト

シテ清國派遣官吏ニ出炭、関スル帳簿ヲ點檢スルノ  
必要アリ清國委員ヨリ之ヲ要求スルトキハ之ヲ應諾  
スルノ至當ナルヲ認メ乙案第七條第二項ニ於テ之ヲ  
規定セリ

### 第十三 鑛史救済ノ事

鑛史救済ノ事ニ付テハ他ノ合同契約ニ往々其例アリ  
或ハ清國委員ヨリ之ヲ要求スヘキヲ以テ之ヲ應諾ス  
ルノ至當ナルヲ認メ乙案第八條ニ於テ之ヲ規定セリ但  
レ目下炭坑ノ鑛史救済制度ハ幾トト完全ノ域ニ達セ  
ルモノナレハ我々於テ之ヲ應諾スルモ何等ノ痛癢ヲ感

セズ

### 第十四 細則ノ有効期限ノ事

此ノ細則ノ有効期限ニ付テハ無期限説即チ石炭ヲ採掘シ  
盡クテ迄トスル説ト有期限説即チ清國ノ鐵道ヲ買収  
スル迄若クハ無償ニテ鐵道ヲ引渡ス迄トスル説ト孰レ  
ニモ論證スルヲ得ヘシ又山西省四川省等ノ炭坑合同契  
約如ク五十年又ハ六十年ノ期限トスルモ可ナリ

甲案ニ於テハ第三條ニ於テ無期限説ヲ採リ、撫順炭坑  
ハ東清鐵道ト別個ノモノシテ之ニ東清鐵道條約ヲ造  
用スルヲ得ストハ清國委員ノ主張ニシテ、今回ノ委員之ヲ

變スヘシト認メス

而レテ我ヨリ主張スル場合ニ於テモ無期限説ニ充分根據  
ナキニアラス即チ第一、増祺將軍カ撫順煤礦公司ニ與ヘ  
タル執照ニ採掘ノ期限ヲ付セサリシコト 第二、前記第七  
ノ說明撫順炭坑鑛區ニ關スル(三)ニ記載セル如ク無期  
限ニテ石炭ノ採掘ニ着手スルノ權ヲ委任シ云々トアリ  
第三、露國カ買收シタル煙台炭坑龍泉ノ代金受領証  
書ニ據ルモ石炭ヲ採掘シ盡クシ迄貸與スル旨ヲ記載  
セラレタレハナリ

然レトモ清國委員ニ於テ從來ノ主張ヲ翻カヘシ鐵道  
ト運命ヲ俱ニスヘキ期限ヲ設ケシコトヲ冀望スルニ於テハ

我亦之ニ應スルノ不可ヲ認メス其理由ハ第一鐵道ナクシ  
テ炭坑獨リ我ニ存置スルモ運炭ノ死命ヲ制セラルニ至  
ルヘク 第二、我ハ炭坑ニ關シテ車清鐵道條約ヲ採用ス  
ルヨリ生スル附屬地問題、材料品無稅輸入等非常  
ノ利益ヲ享有スレハナリ故ニ乙案第ニ條ハ有期限説ヲ  
採レリ





皇

御

奉天散記十二年一月七日  
東京第一 頁二三〇

小村外務大臣

小池總領事

功五郎

大臣

次官

林

去九月十日付機密第一五號掛信ヲ以

政務

テ送付ニ及ビタル烟草換順炭礦、細則案ハ

通商

既に中村總裁ニ於テ承認シタル旨坂口直

人事

吉ノリヲ以テ中村ノ打合、上ノコト、思

會計

考スルモ政府内論議ノ結果可成早ク本館ハ

取調

15日開アリマシ

報告

表

第 8 門

明治 年 月 日  
同 年 月 日  
日 起 草  
日 發 遣

主任

伊 達 邦 武

栗 本 武 雄

電送第 三 一 號  
明治 三 年 一 月 七 日 發 遣

古

青

伊 達 邦 武 氏 儀

中 日 通 商

外 務 省

抑々確立セハ知ナルが大連税務司ハ北京  
信託事務司未タ初令ニ接セサル所ナリ  
お亦作爲後車ノ取扱ヲ維持シ居ルガ爲メ  
物出者ニ於テモ抗御ノ下ニ三ノリスレヲ付メ  
アハ出テナルカ其法洋地ノ法品可港ニ於テ  
課石炭ノ輸入税モ高率トナリ現ニ廣東ニ於テ  
年定ノ額トナリ居ハ出テニ付至急貴地信託  
事務司ヨリテ夫々及案ノ初令ヲ發セシムル所ナリ





第  
17  
門

明治  
年  
月  
日  
起  
日  
發  
遣

長  
吉

主任  
長  
吉

電送第 86 號  
明治43年 月 8 日 時 分發

加地信介  
長

外務省

貴電五條ニ関シ

外務省

外務省

書物  
長吉

八九  
晴

大臣

小村外務大臣 伊集院公使

次官

第四號

政務

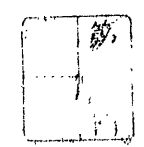
通商

人事

會計

取調

報告



古山

貴電第四號ニ因リ本件ハ元々出炭税等ノ件ト共ニ協約第三條ノ一部ヲ構成スルモノナルヲ以テ出炭税則等ノ件未ク協定ニ至ラサルニ輸出租ノ事ノ此際實行スルコトハ清國側ノ容易ニ同意セサル所ト思ハルモ御訓令ノ次第ニ有之付一月八日望敷彦會見シ本件ノ實行付スル何

等双方ニ協定ヲ要スル事ナク云ハレ協約調印ノ日ヨリ既ニ實行ニ居ラレバキ等ノ事柄ナリト説キ總稅務司ニ訓令ヲ義請求シタルニ望敷彦ハ果シテ前顯本官ノ豫想セシ論法ヲ持出シ清國ノ於テ撫順炭輸出税ニ因リ日本ノ要求ヲ容ルレタルハ日本ニ於テ出炭ニ對スル税金納附ヲ承諾セシカニ爲レシテ協約ノ規定ハ此了解ヲ基礎トシテ成立シタルモノナリ要スルニ協約第三條ノ各項ハ互ニ



相関聯に同時ニ勅力ヲ生スヘキモノナ  
リ而シテ一方ハ今尙全然無税ニシテ協  
約成立前ノ現状ヲ繼續シツ、アルニ拘ハ  
シテ他ノ一方輸出税軽減ノミ、実行スヘキ  
トハ公平ヲ失スルノミナラス協約締結  
ノ本旨、悖ルモノナリト述ヘ本官、於テ法  
理上ヨリ我主張ヲ及覆擁護シタルニ  
因テ執テ動ク、色ナク其内他ノ未答  
ノ待合ハセ居ルモノアリタルニヨリ免ニ  
角再考ヲ望ム旨ヲ述ヘ引取リタルガ

本件ハ結局先方ニ於テ輸出入税率  
ニ関スル協約ノ規定ヲ実行スル、於テハ  
其当日ニ廻リ我々於テ進テ決定セラルヘ  
キ税則ニ據ル出炭税率ヲ進納スヘキ  
ト該合ニテ折合ヲ附タル外ナク是レナラ  
ハ先方ニ同意スヘキカト思ハル御考  
量、上御回訓ヲ請フ

明治 年 月 日  
同 年 月 日  
日 起 草  
日 發 遣

手  
電

在 清  
伊 集 院 公 使

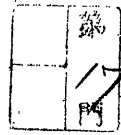
小 村 大 臣

電 送 第 87 號  
明 治 33 年 1 月 10 日 發 遣

第 一 二 号

貴 電 四 辨 之 開 シ 本 件 之 開 ス ル 清 國 側  
ノ 主 張 ハ 其 理 由 ナ シ ト 思 考 ス ル 毛 清 申  
外 務 省

越 ノ 如 キ 幸 情 ナ ル 於 テ ハ 地 際 貴  
地 於 テ 迅 速 纏 理 見 込 無 キ ヤ 認  
メ ラ ル ル 付 撫 順 烟 台 炭 坑 細 則 編 定  
規 定 前 商 議  
讓 ル ト ナ ス ヘ キ 依 リ 貴 地 於 テ ハ  
此 後 本 件 ヲ 懸 案 ト 為 シ 置 カ レ タ シ



報告

取調

會計

人事

通商

政務

次官

大臣

古

傷者十四家屋破壊四、

御坑に於て火薬爆裂死者十七重

本日午後一時四十分撫順炭坑東

第一号

小村外務大臣 小池総領事

奉天城及 明治四十三年一月十三日午後六時  
東京着日 日後九時五

121



第 11 号



号外

明治四十五年 十月十四日

第一課

南滿洲鐵道株式會社

接 哈爾濱

倉知政務局長 殿

清野理事

別紙電報字供費覽候也

公 印

南滿洲鐵道株式會社

電報字

總裁宛

沼田

一月十三日午後六時五分發電

今日午後一時半東郷坑ニ於テ小出シノダイナマイト  
破裂シ附近ノ建物ヲ破壊シ為ニ死者日本人五、支  
那人十三、輕傷者日本人五、重輕傷者支那人十九  
名アリシ旨電アリ

南滿洲鐵道株式會社

電報字

總裁宛

沼田

一月十三日午後六時三十分發電

本日午後二時三十分沙河鎮構内ニ号宿舍ヨリ發火  
三棟焼失事務所ハ破壊シ沙河鎮驛ハ風下ニ  
アリテ危キ旨電アリ

17

明治 年 月 日  
同 年 月 日  
起 發

系

主任 栗 吉



電送第 117 號  
明治 4 年 1 月 17 日 發

興

寺天

山池 任 事

十一

才五海

檢 査 烟 草 及 烟 草 製 造 業 者 名 簿

書 類 細 則 申 述 不

外 務 省

栗 吉 印







海  
三  
支  
升

林  
林  
林

三、甲乙五案并ニ条甲ノ海口ノ見了輸出入石炭

ニ対スル輸出税率ノ定シテハ昨年九月ノ日佐物白

ニ対シテ本邦並四州物定前ト雖モ最重税率ヲ定

施シカベキモノト認め此際より以上之區般伊集原等

ヲシテ陸軍政府者等、對シテ林林林林林林林

且、之區般並四州方々海セシメタル知佐各政府ハ物

才事案ノ見了り水ノ内村ノ数カク事大ナキモノト認

外  
務  
省

口政府が推定<sup>石</sup>炭輸出入税率ノ控減ノ義務シタルハ

然方ニ於テ出炭税率ノ他何ヲ義務シタルニ因ハモノ

トナシ、出炭税率ノ他何ヲ官自<sup>石</sup>炭税率ノ控減

レテ輸出税率控減ノ定スル規定ニ對シテ此後与テ

基礎トセハモノナリ故出炭税率ノ他何ナキ今日輸出

税ノ控減ノミヲ定スルハサハ各立派海峽者方

ニ於テハ<sup>石</sup>炭税率ノ控減ノ主張ヲ以テ現地アウト認め

サルニ對シテ<sup>石</sup>炭税率ノ見込ナキヲ以テ本邦<sup>石</sup>炭税率

本業細分者誠ノ際ニ讓ルトシ其俟之ヲ懸  
 案ト爲シ之ヲヘキ方伊集院ノ仗ニ電ヲ送シ其  
 旨申付テ細分者誠ニ際ニテハ右ノ旨令ヲ以テ  
 継行スルニ決スル旨ニテハ其旨令ヲ以テ  
 以テ計ルベシ也  
 右中計也  
 外務省

二五

要再回

機密

機密

文書課長 送

明治四十三年一月二十日接受

明治四十三年一月十八日起算  
同八年八月廿日

別紙

主任

栗

政務局長

系

機密第七號

在清

侍集院公使

小村大臣

梅嶺烟台兩炭坑細則案

ニ系スル件

外務省

梅嶺烟台兩炭坑ニ系スル細則

案件ニ系シテ試甲辨字ニ通

在在天下池流領事ヨリ請訓

次第有之ニ試乙号寫

通甲帳書及回訓並ニ備

右一括茲及市送付ニ付委

由右ニテ市承知ニ付及以收

中道ニテ器具

清

淨

密

一

四十三子機密受中三七四二号ノ送ニ附属  
書全部字ヲ甲号トナシ

二

小池源助事宛機密送中二号ノ字ヲ  
乙号トナシ

右添付ノ字

外務省

明治四十三年二月七日接獲 主官政務局

第一課

機密第五號

秘受第 473 號

軍

明治四十三年一月三十一日

在奉天

總領事

少佐 長



外務大臣伯爵小村壽太郎殿

換順煙台兩炭坑細則案商議ニ  
關スル件

本月十七日付機密送第ニ号貴信ヲ以テ  
御申越相成候換順煙台兩炭坑細則商  
議ニ關スル御訓示第三項ニ甲乙兩案第

在清國奉天日本總領事館

ニ條中ノ海口ヨリ輸出スル石炭ニ對スル  
輸出稅率ニ關シテハ昨年九月ノ日清協  
約ニ依リ本案細則協定以前ト云ハ此最  
惠稅率ヲ實施シ得ベキモノト認メラルニ  
就テハ本案商議ニ際シテ之レニ關スル適  
當ノ規定ヲ存置スル様尽力致スベキ様御  
下命相成致敬承矣細則効力ヲ既往ニ  
溯及セシムルニ付テハ換順炭坑ヨリ採炭  
輸出ノ當初迄溯ラシムベキカ將又昨年九  
月日清協約商定當時迄ニ止マラシムベキヤ  
ニ就テハ聊カ不明ニ有之矣得共何レニ致  
セ細則効力ヲ既往ニ溯ラシメントスレバ清國  
側ニ於テハ日清協約第三條乙項ニヨリ兩

要四訓

炭坑ノ採炭ニ對シテモ同様納税開始期ヲ  
遡ラシムルコトヲ要求シ來ルベキハ必然ノ事  
ト存矣然ル所撫順炭坑ニ於テハ今日迄  
何等採炭税ヲ納付シタル事無之本案  
協定ノ結果協定以前ニ遡リテ採炭税納  
付ノ義務ヲ負擔スルニ於テハ其ノ失フ所  
至大ニシテ輸出税率ニ關シ最惠税率ノ  
適用ヲ既往ニ遡及セシムル事ニヨリ獲得  
スル利益ヲ以テハ到底彌補シ得ザル義ニ付  
最惠輸出税率ノ適用ヲ遡及セシムル事  
ヲ主張スルハ却テ毛ヲ吹テ傷ヲ求ムル嫌  
有之様思考致サレ矣就テハ右細則案  
商議ハ兩三日中開始ノ都合ニ有之矣ハ

在清國奉天日本總領事館

ドモ追テ何分ノ御垂示ニ接スル迄ハ輸出  
税納付期遡及問題ニハ談及セザルコトニ  
阪口委員ト協議被置矣尤モ従来滿鉄  
會社ニ於テ輸出税ヲ納付スルニツキ抗  
議ヲナシ居リタル主意ヲ貫クガ為メニ前  
記ノ不利益アルニモ拘ハラズ是非共既往ニ  
遡ラシムルコトヲ主張スルノ必要ヲ御認メ  
相成ルニ於テハ事ノ成否ハ免モ角右細  
則案ノ協定大体終了シタル時ニ於テ  
申出シ公文ノ交換ニテ取極ムルヤウ致  
度ト阪口委員トモ相談致置矣ニ付右  
御會ノ上本件ニ關スル御方針至急御訓  
示相仰キ度此段申進候 敬具

再四

送

機密

第17

送

明治四十三年二月十九日接受

明治四十三年二月十九日  
同日發遣

第一課

主任 栗本

政務局長

機密送第一〇號

在奉天

小池滋領事

小村大臣

撫順煙台兩炭坑細則案中

輸出稅輕減及出炭稅、

二ル件

外務省

撫順煙台兩炭坑細則案商議、

案係、就十一月三十一日付機密公

第五号ヲ以テ申請訓、既覽悉

段候輸出稅ノ輕減及出炭稅ノ

納付ハ何レモ日清協約商定前、

漸及スヘカラサルハ勿論、次第ナル

ニ輸出稅、案シテハ該協約中最



憲ノ輸出税率ヲ適用スル旨ノ明  
文アリ、~~出炭税~~出炭税ノ如ク別ニ協定  
ヲ要スルモノト事情ヲ異ニスルヲ以  
テ右ノ輕減ハ昨年九月四日協約  
調印ノ日ヨリ直ニ効カアルト當然  
ノ義ト思考シ其際旨ヲ以テ最  
モ在清公使ヲシテ清國当局者ニ  
交渉センメタル義、有之ヲ變去  
外務省  
月十七日付機密送テニ号ヲ以テ  
申進置女通り清國側ニ於テハ  
輸出税輕減ノ案ニル規定ハ出炭  
税ノ納付ヲ我方ニテ承諾シタルニ  
因ルモノナルヲ以テ出炭税ノ納付ナ  
キ間ハ輸出税輕減ノ規定ヲ實行  
スルヲ能ハサル旨主張致我ニ於  
テ有之右清國政府ノ主張ハ我



主帳ト異ナリ居レリト虽比急速並  
 京ニ於テ交渉ヲ纏ムル見込ナレト  
 認メ本問題ノ決定ヲ細則商議  
 ノ際ニ懷リタル次第ナルニ依リ貴  
 官ハ細則商議、方リ先ツ我方ノ  
 解釈通り輸出税軽減ハ昨年九  
 月四日、溯リ之ヲ實行シ出炭税  
 ハ細則協定ノ日ヨリ納付スルナレ  
 外務省  
 清國側ノ同意ヲ求メラル、  
 差シ右ニテ到底情  
 國側ノ同意ヲ得ルヲ能ハサルニ於  
 テハ細則協定ノ日ヨリ出炭税ヲ納  
 付スルト共ニ輸出税軽減ヲ實行  
 スヘキヤ或ハ昨年九月四日、溯ルカ  
 又ハ其他一途ハ昨日ヨリ納付シ同日ヨリ  
 出炭税ヲ納付シ輸出税軽減  
 ヲ實行スヘキヤトノ問題トナリ

滿鐵に於て重大ナル利害關係ヲ有  
スル事ト可相成テ、付其實際何  
レに依ルヲ利益トスルヤ、就十滿鐵  
側ト協議ヲ遂ケラレ何有ノ儀中  
申附ルル程に及ビ改及回  
訓候也

外務省







今日第一回會談、少々質問あり、下座あり、ヤ  
我曰、八可ナリ

彼曰、錫男、廣く過ぐト名ノ以何

我曰、錫男、確走不勤ハ事、実ニ我ニ於テ、炭坑  
治業ハ証憑者、難キ、由、西書ト認ム、社、商、  
ト提出シ、ンナリ

彼曰、我ニ方、於テ、之、廣く過ぐト信ス、ト認憑ナリ

現今、撫順炭坑ノ日々、出炭高、幾何ナリヤ

我曰、出炭高、日々、異動ナリ、現今、慶千五百噸カ  
至二千噸位ナリ

彼曰、秋産、坑口厚價、幾ヒキ、ト、見、坑口厚價

ト、幾何ナリヤ

我曰、坑口厚價、炭坑、於テ、出炭、量、是、定、量、ノ  
計、多ク、本社、引渡ス、ト、價、相、ナリ、出炭、多ク、ハ、厚價  
相、ナリ、出炭、少ク、ハ、厚價、白、ク、高シ

彼曰、三、今、厚價、何程ナリヤ

我曰、一、円、至、十、圓、内、外、ナリ

彼曰、奉天、ノ、撫順炭、ノ、洋鉄、十一、二、元、ト、販賣、セ、テ、

見、然、ラ、ハ、非、常、ノ、利、益、也、ト、云

我曰、石炭、ノ、賣價、競、争、炭、ノ、關係、由、夫、定、額、

奉天、ノ、販賣、又、之、高、キ、之、数量、僅、少、ナリ、ト、云、及、テ、

遠方、輸送、セ、テ、販賣、ス、ト、モ、競、争、炭、ト、關係、上

非常低價なり

依曰、税金、林口高價、依、謀、七、理、由、本、町、  
依曰、値、目、地、主、貴、因、難、法、者、市、前、林、口、保、  
後、率、多、博、物、之、設、明、後、之、後、之、法、保、後、率、之、  
均、價、之、法、也、也、也、

考、同、心、貴、金、銀、之、法、也、也、也、何、の、道、者、也、也、  
意見、之、情、也、也、也、

依曰、直、接、者、之、米、林、口、依、之、法、也、也、也、在、地、  
之、節、也、也、也、

依曰、後、在、同、心、貴、金、銀、之、法、也、也、也、何、の、道、者、也、也、  
之、節、也、也、也、

最、輕、之、法、也、也、也、貴、國、失、政、也、也、也、何、の、道、者、也、也、

亦、是、之、法、也、也、也、朝、法、之、法、也、也、也、何、の、道、者、也、也、

依曰、直、接、者、之、米、林、口、依、之、法、也、也、也、在、地、  
之、節、也、也、也、

依曰、後、在、同、心、貴、金、銀、之、法、也、也、也、何、の、道、者、也、也、  
之、節、也、也、也、

依曰、直、接、者、之、米、林、口、依、之、法、也、也、也、在、地、  
之、節、也、也、也、

依曰、後、在、同、心、貴、金、銀、之、法、也、也、也、何、の、道、者、也、也、  
之、節、也、也、也、

依曰、直、接、者、之、米、林、口、依、之、法、也、也、也、在、地、  
之、節、也、也、也、

依曰、後、在、同、心、貴、金、銀、之、法、也、也、也、何、の、道、者、也、也、  
之、節、也、也、也、

依曰、直、接、者、之、米、林、口、依、之、法、也、也、也、在、地、  
之、節、也、也、也、

依曰、後、在、同、心、貴、金、銀、之、法、也、也、也、何、の、道、者、也、也、  
之、節、也、也、也、



奉 照 准 上 兵 庫

明治四十三年五月二十一日 附屬書類添附

主務政務局

8599

第一課

公信第四七號

明治四十三年四月十五日

在長春

領事

杉本 龍



通馬

外務大臣向島小村壽太郎殿

伊通州之於我接順炭之計一割五分ノ統稅

ヲ課徴スル件

本件ノ關シ本日は在吉長省嶧嶧領事官宛別紙官文ノ通  
照會致置向御参考ノ上此水中述如敬具

先づ情志深視、根柢  
明白トナリ、後迄  
誠敬トシ

第 17 門

明治四十三年五月二十八日記録一部受

在清國長春日本領事館



寫

明治四十三年四月十五日

在長春

領事 松原一雄

在吉林

領事 山崎三雄

伊通州に於て我撫順炭に對し一割五分の統税を課徴スルノ件

我撫順炭に於て伊通州に於て販賣スルに對し内地清回官憲の統税を稱し從價一割五分ノ不當ナ

在清國長春日本領事館

ル課税ヲ始メ不便斯カラサル旨該后炭販賣ニ從事スル在奉天松昌公司ヨリ申出シ付本官ニ不取敢穩便ノ方法ヲ以テ事實ヲ有無ヲ確メ若ク是事實ナルトキ其理由ヲモ回示セシトトテ希望スルノ趣意ニテ別紙第一号寫ノ通り私信ヲ以テ同地官憲ニ照會致置不処別紙第二号寫ノ通り回答ニ接シ候尚滿鐵側ニ於テ本件ニ對シ何等カ取調ヲ為シタルコトアリ凡セハ本件ニ關スル其意見等同社ニモ問合セ候処同社ヨリ別紙第一号寫ノ通り回答有之候依テ查スルニ滿鐵ノ前後二回迄モ當地ノ調査ヲ試ミタルモ不得要領ニテ同社ニ

於て右一割五分ノ課税ハ果して如何ナル  
理由又ハ~~右~~因ルモノナリヤヤ疑ヒ右ハ  
單ニ當該徵稅吏ノ隨意ニ不當專恣ノ課税  
ヲ爲シ居ルモノト認メ候様ニモ相見ハ候  
然ルニ他方前記<sup>伊通</sup>吉林官憲末翰<sup>別紙</sup>ヲ示シ  
ニ依レハ

一當該吏ハ煤稅一割五分ヲ抽取スルハ度支  
ノ旨ヨリ發布セラルレタレ定章ニ從テモノ  
ト主張スルモノト如シ果して度支司ハ  
此種ノ定章ヲ發布致候部之ヲ發布シ居  
ラハ利害關係有タル本邦人ニ示シ右ノ  
寫一本ヲ本官ニ於テ請受ケ度候

二又右徵稅吏ハ煤炭ヲ運ニテ伊通州ヲ販

在清國長春日本領事館

賣セシトスル日本商人ハ必ク兩國ノ條約ヲ  
遵守シ納稅ヲナシテ徵稅局ハ決シテ  
收買スルコト能ハサル旨記載有之ハ知  
今右種條約ヲ安布スルモ未タ撫順炭之  
對シ一割五分ノ課稅ヲ爲シ旨ヲ規定  
シタル兩國間ノ條約ヲルヲ發見シ得  
ス依テ吉林官憲力果して條約ヲ根據  
トシ本件課稅ヲ主張スルナラハ其如何ナ  
ル條約ニ基キヤ承知致度候  
二當該徵稅吏ハ本官ノ同意セテ對シ單ニ上  
司ノ命ヲ奉シ法規ヲ遵奉シテ職務ヲ執行  
スルノ外徵稅ノ自由又ハ立法ノ根據ヲ示  
スノ權能ナレト自認スル如クナルニヨリ

奉天總領事

今や其上司の對し本件ノ如キノ關シ本官  
等ハ清國相當官憲ニ對シ同合セテ有ラズモ  
敢テ不都合ナキノコトヲ不寧口當然ノコト  
ナルハ云フ迄ニナキ義ト存ス

前頭ノ次第中同意ノ有ク候々此際至急前記  
ノ要矣ト奉テ貴地相當官憲ニ内交渉ノ方  
相燦度又内交渉ノ結果ハ市回指相成云標  
致度右モ滿鉄米輸中記載ノ如ク極順致境  
課稅問題ノ目下奉天ニ於テ根柢中ニ係ル  
趣ニ有之候ハ其果シテ本件力該問題ノ關  
係ナルモノトスレハ該問題ノ交渉完了スルマ  
テハ清國官憲ニ於テ前記一割五分ノ課稅ヲ  
有ラカ如キハ本官ノ了解ニ甚ク少ク有之

在清國長春日本領事館

其將又右滿鉄總裁米輸中記載ノ奉化ノ側  
モ下レハ此際相當官憲ニ口頭ニテ交渉ノ  
結果免稅トナルノ餘地モ有之矣標市認メ相  
成云ハ是又可然中取計ニ相成候標致度此  
波中依頼申進候

敬具

此字本台信寫一通宛夫ニ本有大臣公使  
奉天總領事立都替ハ送付致置候



卅号  
寫

敬啓者茲有奉天日商松昌公司稟稱該公司販賣撫  
順炭坑所產之煙煤為業到今已有年數此次運往  
貴州販賣然貴州統稅局聲明定要抽收按賣價  
一成五分之稅捐若代賣之人不肯納捐勒索買主  
若於買主隱匿買用不報者從嚴罰懲不貸為  
此現時該公司在貴州一概不能販賣等因前未敢  
署查此事抽收煙煤稅原不合公理想必事出於  
誤違情由然敢商萬不能詐告偽訟茲請

閣下查明此事是係實否乎若實有此事務祈轉  
飭該分局立刻廢止此款稅項而企隨便販賣以期  
貴國商人能統費廉價煤炭實為公便然若  
閣下以此項稅款為必須抽收之款請示據何理論

在清國長春日本領事館

抽收等因故署再講相當辦法或交涉與吉林公  
署或貴國政府當路以期妥為辦理而免此等不  
當課稅以期保護商人也茲請從速賜覆併祈  
貴正堂大人日祉

宣統二年二月二十日

訳文

拝啓今般日本商人松昌公司より該公司ハ  
数年來撫順炭坑新産ノ煙煤ヲ販賣シ  
来リタルモノナルカ今回該石炭ヲ貴州ニ輸  
運販賣セントスルニ於テ貴州ノ統稅局ニ於テ  
賣價一割五分ノ稅金ヲ課シ尙ホ代賣人  
ニシテ納捐ヲ肯セサルニ於テ此中買至日  
リ勤業シ若シ買至ニ於テ隱匿買用スル於テ  
ハ從嚴罰懲スル旨聲明シタルヨリ現  
時該公司ハ貴州管内ニ於テ一概販賣ス  
ルコト能ハサルニ至リタル旨稟稱シ来  
テ査査スルニ右煙煤稅ヲ抽收スルカ  
ハ原ト以理ニ處セサル歟ハ有之想フ

在清國長春日本領事館

ニ必ス何等カノ間違ニ過キサル可キモ日本  
商人ヨリ詐告致スルキ理由モ相違有リ  
貴官ニ於テ右事實ノ實情ハ  
明ノ上若シ事實ナリトセハ該分局ニ  
轉送ノ上立口ニ右課稅ヲ廢止シ該公司  
ニ於テ隨意販賣シ得ルト共ニ貴國商人  
ヲ以テ廉價ナル煤炭ヲ燒用シ得ル概中  
形計相成度也ニ貴官ニ於テ本稅ハ必ス  
抽收スルキモノナリトハ御意向ニ合ハ  
ハ其理由ヲ所開示相成度然ルトキハ當館  
ニ於テ更ニ相當ノ辦法ヲ講スルヘク或ハ  
林公署又ハ貴國政府ノ審判ニ向ヒテ交渉  
ノ上此等不當ノ課稅ヲ免シ以テ商民ヲ保

後不此標取計可申、依、至急何分、所、回  
報相規度此、般申、進候、教具、

何通州正堂、

宣統二年二月二十日

在清國長春日本領事館

寫

敬覆者頃接

來函具悉壹是查伊通統稅局係由本省度支司憲  
委員辦理不歸敝州管轄敝州接到來函當即轉達  
該局據該局西復稱本局稅務科則皆由度支司領發  
本局遵照辦理不能稍有出入煤稅抽收壹成五亦係  
頒發定章自應遵辦日領事所請立刻廢止之說  
碍難照准應請轉覆日領事傳諭日商嗣後日商  
運煤來伊通販賣應遵守西國條約照章納稅  
本局決不能稍有歧異至

來函所稱不合公理及詰問憑何理論抽收等語此  
係中國國稅由本省大憲 奏准領行自有立法原  
理局員職在奉行定章不能攙越立法之權日領事

在清國長春日本領事館

雖有質問本局員不應置答請即一併函覆等  
情前來據此相應據情函覆即希  
答照順頌

日社

名另具



中文寫

款文

押復所末函一題致承致矣然此係通州  
 統稅局之本省及支司委之辦理之  
 處之概本知州一管轄之歸也其  
 函之接已矣其其一題該局之轉達  
 其處該局之稅務種之皆復支司之  
 辦理之其外此之通事之得之  
 之其定章之從之其之日本領事  
 之其之廢止之其之通知之其之  
 之其之難之其之日本領事之其  
 之其以後日商之煤之運之其  
 在清國長春日本領事館

販賣セトスルモノハ必不兩國条約ヲ遵守シ納  
 稅スヘイ本局ハ決シテ收異スルモノ能ハス  
 今理之存セムカ又ハ如何ナル理論ヲ依ツテ抽  
 收ナルヤ等ノ語アルモ抑々中國々稅ハ本省ノ  
 上憲力奏准ノ上頒行セルモノ係リ立法ノ原理  
 ヲ有スルモノナルモ其職責上定章  
 ヲ奉行スルノ外立法權ヲ攪干スル能ハサル  
 次第ヲ存之日本領事ヨリ一質問アリト雖本局  
 莫ハ回答ナス一要無之云々トハ回答ニ接シテ  
 其右所ノ承相成度其出及回答ハ

教員

通州正堂 張治仁

駐長日本領事館



叶三子  
寫

南滿洲鉄道株式会社

總裁 中村 是 公

在 長 春

御事 松原 一 旋 殿

折付三月二十日付雜仕中三号ヲ以テ

伊通州ニ於ケル撫水炭課税ノ件

ニ關シ市照會ニ趣致承付ハ本件課税ノ關  
シテ本年一月社公才ニテ事實ヲ調査セ  
シムルノ決也之出張セシメテ總務不重  
トテ遂ニ不得要領ニテ其稅額等モ從テ  
不明ニテ如何ナル名目ノ下ニ課税シ居ルヤ  
其後松昌公司ヲテ調査セシメテモ依然  
曖昧ニテ單純ニ課税ハ免ル可クナル旨回

在滿國長春日本領事館

答云 趙元末吉林省制定ノ稅目中特ニ石炭  
ニ對シスル稅率ノ規定ハ無之稱ニ存者  
之ニ付土貨トシテ取扱フモノトスレハ  
之ニ稅率ハ七四捐即チ一分一厘ノ稅ニテ  
是リ附加稅ヲ加フルモ一割五分ノ稅率ハ  
頗ル不當ノ處置ト被存者トテテテテテテ  
使司ノ凡テノ石炭ニ對シテ確的ニ課稅  
シ居ルヤ否ヤヲ甚ク疑ハシク單ニ此  
稅吏ノ裁量ヲ以テ課稅決定ス標者見  
申共ニ付此偏頗ノ取扱ニ對シテ納稅  
甘諾スルモ如何ハ存居テ前モ本件ノ如キ  
モ目下奉天ニテ煤高申ニ係ル撫水炭坑課  
稅問題ト共ニ解決サレテ事ト考テ此儀

中念(一)上可然市取并被下成度物上付  
遜白「昨年奉化」控手同格(一)例起(一)等  
奉天度文司(一)口頭(一)文涉(一)結果免稅  
不(一)事(一)相成(一)考日(一)於(一)「賭場稅」(一)納付  
已(一)不(一)居(一)為(一)慮(一)申(一)請(一)也

敬 呈

在清國長春日本領事館

王 方 休

三十五号  
公信第五六號

書政務局

第一課

附屬書類添附

受第 10861 號

明治四十三年五月九日

在長春

領事

松本 貞一



外務大臣伯爵小村壽太郎殿

伊通州に於て我機順炭に對し一割五分ノ統稅ヲ

課徴スルノ件

本件ノ関シ客月十五日付公信第百七号ヲ以テ申進候次  
第有之矣但本日更ラ之吉林岩崎領事宛別紙第  
一号字ノ通リ電報シ且ツ別紙第百二号字ノ通リ郵  
報致呈ル内御答考迄ニ此段申進候敬具

四月三十日五月二十八日記録一部受

在清國長春日本領事館

第 17 門

清國長春日本領事館

カ  
寫

四三、五、九日

吉林岩崎領事宛電報

四月十五日付公領第三。号。往信ニ関シ今回又々松昌公司  
ヨリ税局ノ催促大ニ急ミシテ頗ル困却シ居ル由申出テ又  
タ一度納税スレバ取返ヘシツカザルヨリ彼我ノ交渉進行  
中ハ当分課税ヲ見合ハス様至急清國官署ニ交渉  
セラレ度旨願出デタリ若又シ交渉ノ結果人愈々納税ス  
ルキ様決定スレバ其切合ニ至リ溯ツテ納税スルキハ滿鉄  
ヨリ当館ニ対シテ<sup>書</sup>ハシムルコトヲ得マント信ズ右至急御配  
慮ヲ請フ松原。

在清國長春日本領事館

カニ  
寫

公任分三七号

明治四十三年五月九日

在長春

領事 松原一雄

在吉林

領事 岩崎三雄殿

伊通州に於て我撫順炭に對し一割五分、

統稅ヲ課徴スル件

本件に關シテハ五月十五日付公欲第三〇号往信並

本日及先往電ヲ以テ申進候次第有之候処尚モ

別紙松田公司ヨリノ數願書字別紙ノ通リ御参考

在清國長春日本領事館

送及御送付候故具

寫

拜啓

過日ハ早速御返翰ヲ接シ茲有奉拜謝矣  
 貴札ニヨリ吉林ヨリ未タ確答無之由又  
 清國官憲トハ交渉ナレハ急ニ遲ニ兼テ莫  
 係ハ充分承知仕奉ハ共稅局ノ催促火急  
 ナル由ニテ燒鍋モ太ク困却ニテ今ニモ納  
 稅セサルヲ得サル有様ヲ有之若シ一度納  
 稅ナルトキハ取返シ附カサル事ニ相成尚  
 未將來ニモ大ク關係可致手ト存居矣一割  
 五步稅ノ要求ハ無法苛酷トシテ庸ニ小生  
 一個人ノ問題ニモ無之矣知所而創設ニ恐  
 編ヲ奏ハ共交渉決定途當稅ト是知ハ答レル  
 稱稅稅局ハ佛交渉相稱リレ同敷部編未

在清國長春日本領事館

交渉ノ結果若シ納稅スルトニ決定仕奉場  
 合ハ必ス松昌公司或ハ燒鍋ヲシテ納稅セ  
 之ムハキ旨御申下ラトハテモ宜敷後日  
 決定ノ上若シ松昌或ハ燒鍋ニテ納稅金支  
 払不能ナルヤモ知レストハ恐レモ有之矣  
 ハハ滿鉄ヨリ貴引受ケ支払フハキ旨滿鉄  
 ヲ貴領事館ヲ對シ誓言セシメテモ宜  
 敷中庭委員間是支ナキ限リ柯率統稅局  
 ハ當稅徑從テ交渉決定途差控ハ答ル  
 稱中交渉相稱上矣 句ニ敬具

明治四十七年四月二十日

松昌公司

長春領事館

ソノハ



公領第二五號

明治四十三年六月六日

在吉林

領事 岩崎 三雄

在長春

領事 松原一雄 殿

伊通州、於先我接順炭、對一割五分ノ統稅ノ課徵スル件回答

伊通州、於先我接順炭ヲ販賣スルニ對シ、同地清國官憲ハ、統稅ト稱シ、從價一割五分ノ不當ナル課稅ヲ始メ、不便歎カサレ、旨在奉天松昌公司ヨリ申出タルニ對シ

在外公館

貴官ト伊通州官憲ト、往復公文及ニ滿鐵總裁來翰ヲ添ヘ、右不當課稅ニ對シ、當地官憲ト交渉方、四月十五日付公領第三五號並ニ五月九日付公領第三七號ノ以テ、御申越ノ趣致領承、右ハ直ニ當地交涉使ニ向テ、右統稅章程中石炭ニ對スル稅則ノ送付並ニ之カ減稅方ヲ照會致カ、要當時實報致置、先通テ郵支、沙使歸任ニ迫リ、居テ折柄、其事務引継後、追見合ハセ、交易申越ルヲ以テ、五月十五日事務引継後、談判ヲ開始致カ、先緒ニ十七年十二月長將軍時代ニ別紙告示文、寫ノ通り石炭ニ對スル稅率ヲ一割五



分ト定メ爾來吉林省全般ニ於テ從價一割  
 五分ヲ徵收シ塔爾圖ニテ今更之カ變更ヲ為  
 スト容易ナラストノ事ニ有之共均共右告示  
 文ノ誤讀スハ右一割五分ノ採掘地ニ於テ  
 從價ニ對スルモノナリトシテ之カ根據トシテ右  
 一割五分ノ不當ナルヲ論シ輕減方ヲ要  
 求致此結果彼ニ於テモ一割五分ノ苛税  
 ナラズノ認メ當地巡按度支使ト數回協  
 議ノ上奉天總督ニ電報ヲ照會シ五月  
 廿一日電報致置共自了<sup>畫者</sup>一般ニ從價五分  
 減之共起伊通州官憲ニ通告シタル由  
 中官ニ通知有之共或ハ五分税ニテモ尚ホ過  
 重ナヤニヒ考共ハ元來此種ノ税ハ  
 在 外 公 館

清國官憲ニ於テ自由ニ規定シタル内地  
 税ニテ既ニ一割ノ輕減ヲ爲シタル以テ尚ホ強  
 ク輕減方ヲ要求スルニ益トモ存共ニ付  
 税率問題ハ一先ツ一段落トシ中村總裁  
 來翰中奉化ニ於テ「年税」旨記載有  
 之共<sup>之</sup>付以例ヲ援キ我塔順炭ニ對シテハ奉  
 化於先ト同様吉林省内ニ於テモ年税トスニテ  
 更ニ交渉致共奉化ニ於テ年税ニ爲シタル  
 事由ノ審ニヤサリトテ奉天ニ聞合セタル上當  
 省ニ於テ適用シタルモノナラ時ハ年税ニ取計  
 コキ旨回答有之共案ヲ精片承知相成友  
 尚共五分税ヲ納付スル外該方年税ト  
 存共五分税ノ松島公司ノ内傳<sup>通</sup>取友

此段及用卷多

自本位寫、大目北原、今使吉天  
總領事、及送子去也

相承修子、來之領事之、如子代略

在外公館

公領第三七號

明治四十三年五月九日

在長春

領事 松原一雄

在吉林

領事 岩崎三雄 殿

伊通州ニ於テ我撫順炭ニ對シ  
一割五分ノ統稅ヲ課徴スルノ件

本件ニ吳<sup>ニテ</sup>ハ 客月十五日付公領第三〇  
號往信並ニ本日甚<sup>ニ</sup>往電ヲ以テ申進

在外公館

候次第有之候處尚<sup>キ</sup>別紙松昌公司  
ヨリノ 歎願書寫別紙ノ通リ 御系考  
迄ニ及御送付候 敬具

別紙取書略云

吉林<sup>將軍</sup>副都統<sup>成</sup>長為出示曉諭事、籌餉總局案呈  
竊維時勢多艱、餉源中斷、善後賠款、繁費百  
端、前蒙憲飭、籌辦各捐、工藝地利未興、商力究  
屬有限、茲查吉省煤窰、初由工司經理、准令商  
人領票開採出煤、賣錢一吊、酌抽錢二百文充餉、  
嗣因中俄交涉、改歸交涉局經理、現據委負查  
明票稱、查得缸窰鎮一帶煤窰、經領票商人  
藉票重征、每窰出煤百斤、抽分二十二斤、已屬  
違章不法、且任意估奪、隨意作價、更屬擾害  
窰丁、况該商並不遵用工司發給印票、竟敢  
自行刊刻圖記、票據填發、實屬有干例禁、  
懇請改歸官辦、減收抽分、化私為公、各等情、  
到本<sup>將軍</sup>副都統、據此、查缸窰一帶煤窰、既據查明領  
票商人抽稅積弊、自應改歸官收、窰丁苦累、  
自係實情、允宜加恩體恤、現在援照奏定礦  
務章程辦理、按每百斤、抽收十五分、歸公、每出  
煤百斤、改抽十五斤、仍隨買煤之燒當油坊、  
按照山中煤價、賣錢一吊、扣收稅錢一百五十文、  
著自本年運煤之日起、一律照收、仍由委負  
發給籌餉總局稅票為憑、不得再由窰商收取、  
所有一切規費、概行蠲免、以示體恤、派員設局  
征收、並往查明用煤之家、扣收煤稅若干、解省充  
餉、及嚴緝私刊稅票之奸商、照例懲辦、外、令行出  
示、曉諭、為此示仰窰丁商舖一體知悉、須知私  
為公酌減稅款、務必踴躍輸將、倘有領票商人

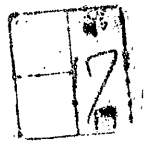
在外公館

再收煤稅、立即扭交煤稅委員、詳省究辦、慎毋  
稍受欺愚、其各凜遵、毋違、特示

光緒二十七年十二月二十二日

在外公館

内局



機密第八〇號

主官 政務局

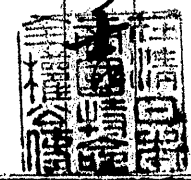
秘受第一九一八號

附屬書類添附

明治四十三年六月十六日

在清國

特命全權公使伊集院彦



外務大臣伯耆守村嘉平郎殿

伊通州、於、松、崎、處、對、  
一、割、立、台、統、稅、保、繳、  
二、併、  
三、併、

本件、係、三、本、使、在、外、公、事、九、号、  
在、吉、林、省、靖、安、縣、報、告、對、  
別、紙、寫、  
在清國日本公使館

同、左、様、請、承、知、相、成、度、此、致、申、達、  
候、取、具、



官上吉林地方官上同、移之此度、  
 河内極前、野田別、協定に至らん、  
 一時の辦法、過十、義に付、貴地、  
 官官、移之此點、付、誤解、  
 十、橋、折、り、見、申、言、正、力、  
 此、後、申、進、也、  
 進、之、在、件、  
 之、後、復、馬、本、使、考、之、  
 早、後、  
 以、通、付、方、之、  
 處、以、收、中、  
 也、

在清國日本公使館